

登山と私

鮎澤 清次

「また山か。」とあきれ顔の眼差しで亡き父によく言われた言葉。20代の頃の私は、毎週末には必ず山登りに行っていた。行かない日があれば、「どこか身体の具合でも悪いのか。」と心配される程、山に没頭していた。いつかは海外の山を登りたいと夢を持っていた。そして最初の夢がかなったのは、皮肉にも勤めていた会社が倒産した時だった。その頃26才の私はロッククライミングに夢中になっていた。

再就職よりも、海外登山に行けるチャンスを優先させた。初めての外国、ヨーロッパアルプスに胸をときめかせ、見るものすべてが新鮮に映った。山岳写真集で見たモンブラン山群の山々、スイスアルプスのマッターホルン、北イタリアのドロミテ山群の岩壁を多く登ることができた。3ヶ月間の滞在で多くの外国人とも友達になれた。その中で1ヶ月間、一緒にイタリアを登山したフランス人とは、今でも交流している。

その後登山を優先できる週休2日の会社を探す但自分の条件に満たされた会社には恵まれず、結婚相手が先になってしまった。結婚式に会社の上司のスピーチがなく失業中の身分が彼女の親に知られてしまったこととヨーロッパで使い果した貯金、彼女の資金であげることができた式と披露宴は大きな声で言える話ではない。あわてて就職した1年生社員の収入は少なく、子供が生まれたあとも障害者施設の保母をする彼女の勤めに助けられた。

私の登山も彼女の理解で続けることができた。週末、5月の連休、お盆の夏休み、年末から正月の休日は全て山の世界にいた。2人目の子供が生まれる時も山、この時ばかりは今でも弁解はできない。常に山を優先してきた登山人生の山歴は、やめた会社の数の履歴より優れていた。国体の参加からロッククライミングの大会では上位を独占し、全国大会ではチャンピオンにもなれた。おかげで初めてのテレビ出演はゲレンデクライミングの実況中継となった。

山への情熱はますますエスカレートし収入も安定した32才の頃、ヒマラヤ登山の未踏峰はなくなり、未踏ルートから無酸素の8000m峰へ変わりつつあった。所属山岳会の仲間からも、ヒマラヤ登山の興味は夢から現実へと話が進んだ。山岳会の創立25周年を記念してヒマラヤ遠征登山隊長として、5名の隊員が夢を膨らませた。偵察を含め1年半近く、準備とヒマラヤに向けたトレーニングが続けられた。遠征期間は3ヶ月間に及ぶ。脳裏にはまた会社捜しの苦労がかすむが、既に心はヒマラヤ。出発は数ヶ月と迫った。計画書を持って上司に!!

数日後、本社から届いた返事は「3ヶ月も休日をとった人はいない。前例は作れない」だった。これで思い切って山に行ける。何のためらいもなく気持ちを切り替えできた。次の会社の事など考える余裕もなく出発を迎えた。既に私以外にも3名が退社した。





目標の山はインド北部ガンゴトリ山群、チベット国境近くに位置する。ヒンズー教の修業者にとって一度は行って見たい聖地の山域、ガンジス川の源流となっているからだ。神々が宿る山々は 6,000m から 7,000m。峰が連なる鋭い針峰群の美しさはヒマラヤの中でも最も名高い。聖地は肉を禁じ、持ちこめば災いを恐れた。私達が目標に選んだ山はバギラッティ-I 峰 (6,856m) 東面からの未踏ルートを、もう一つは同山群の中では未踏峰として残されていた無名峰 (6,702m)、1,000m 以上の垂直の岸壁がこれまで登山を拒んできたものと思われる。いよいよキャラバンの開始、33名のポーターも有り付けた現金収入の仕事に笑顔でこたえてくれた。

ところが開始早々になって肝心な隊員の調子がでない。インド特有の強烈な下痢と高度順応の遅れに最初からつまづいた。ベースキャンプ (4,500m) 設営後、全員が顔を会わすことができたのは 10 日ほど経過していた。空気の薄い高所

では少し歩いただけで息がとぎれる。思っていた以上に高度をかせぐことができない。少しずつ焦りが募る。苦しい登山の連続、追打ちをかけるように最後のアイスフォール帯のメドがつきはじめた時期には、秋は深まり雪が連日降り始める。気温が下がった深夜。寝静まった暗闇の中で突然ものすごい大音響をたてて、氷雪の崩壊が発生する。とんでもない大きなカミナリ音かと地響きの恐怖に思わず寝袋の中で手を合わせ祈るしかなかった。定期的に何度も起きる崩壊は今度こそ寝ているテントを押しつぶすのではと。これまで山で何度も危険と遭遇してきた中でヒマラヤは違った。こんな恐い思いをしたのも私だけではなかった。となりで寝ている仲間の身体は震えと大きなうめき声がいっそう緊迫状態に、こんなことが朝まで続いた。もうこれまでか。

そっと偲ばせてきた家族の写真を見る日が多くなった。この登山が無事登頂できれば最後にしたいと決意させた。危険な箇所も通過し得意な岸壁はぐんぐん高度をかせいだ。やっとたどりついた稜線からは、新たなパノラマが望めた。

最終キャンプまでルートを導いてきた私の身体も高所の長期滞在でシャープなやせた顔も腫れあがり下山をよぎなくされた。最後の難関は元気な後輩に頂上アタックを託した。そして遠征は終わった。計画の段階から取材してきた記者に朗報は伝わり大きく報じられた。

長い長いプロセスからようやくたどりついた頂は力を含ませて達成できた証。初登頂の無名峰の名はガルダピーク (神の鳥) と命名。

夢と希望を優先できた人生に今も悔いはない。

ただひたすらにより厳しく困難な山を目指した精神は人間社会の苦境にも、大きな支えとなってくれることを信じてやまない。

平成 11 年 3 月 15 日
知的障害者通所更正施設「けやきの家」会報 掲載